

Title	「白兔記」のテキスト
Author(s)	西尾, 俊
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 39 P.37-P.52
Issue Date	2005-12
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/11381">http://hdl.handle.net/11094/11381</a>
DOI	
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『白兔記』のテキスト

西尾俊

はじめに

『白兔記』の現存する明清期の版本には、明末清初の汲古閣刊本や明・万暦年間（一五七三―一六二〇）の富春堂刊本、明・成化間（一四六五―八七）刊本がある。そこに曲選や曲譜が収める『白兔記』の部分的なテキストを加えれば、<sup>①</sup>明清期のテキストだけでも、整理しておかなければ把握しづらい分量や複雑さに達する。しかし整理に当たって、多くのテキストはその成立年を見極め難く、各テキストの継承過程まで明らかにするのは難しい。そこで本稿では、便宜上、汲古閣本や富春堂本にどこまで接近しているかによって分類整理を行う。

## 汲古閣本系統

まず、汲古閣本（汲本と略す）と文字の異同が少ないものを、以下に使用テキストと共に挙げる。

○『呉歛萃雅』／明・周之標編 明・万暦四四年（一六一六）自序刊本／『善本戲曲叢刊』（台湾学生書局影印）一

九八四・八七年) 所収本を使用

「寒況」(汲本第二出) 「遊春」(第八出)

○「珊瑚集」/明・周之標編(序によれば「吳歛萃雅」を「増定」) 「吳歛萃雅」以降成書、明末刊本/同右

「遊春」(汲本第八出)

○「詞林逸響」/明・天啓三年(一六三三) 序刊本/同右

「寒況」(汲本第二出) 「遊春」(第八出)。曲の後に付けられた注まで「吳歛萃雅」と似る

○「南音三籟」/明・万曆四五年-天啓六年(一六一七-一六二六) 成書、明末刊本/同右

「寒況」(汲本第二出) 「遊春」(第八出) 「回獵」(第三一出)

○「樂府遏雲編」/明末刊本/『統修四庫全書』(上海古籍出版社影印 一九九五-二〇〇二年) 所収本を使用

「遊園」(汲本第八出)

○「南北詞広韻選」/明末成書、清初抄本/同右

【金井水紅花】二曲(汲本第八出)

これらは白を載せず、場面の選択も似ている。汲本との近さについては、例えば汲本第八出第三曲は「前腔」沙暖鴛鴦睡、銜泥燕子融、楊柳扠簾籠。雨濛濛、雛鶯舌弄、香襯輪蹄歸去。桃杏漸輕紅、人如在錦屏中也囉。双双轉過、転過疎籬。手捻花枝、挿在鏤金釵鳳。「合前」となっているが、「吳歛萃雅」「珊瑚集」「詞林逸響」「南音三籟」「南北詞広韻選」は異同が無く、「樂府遏雲編」は第九句の初めに「合」和你」が付くだけである。

次に挙げるのは白を載せ、汲本に近い、或いは汲本に基づいて改変されたと想像されるものである。

○『玄雪譜』／明末刊本／『善本戯曲叢刊』所収本を使用

「回獵」(汲本第三二出)

○『醉怡情』／明・崇禎間(一六二八―四四)原刊、清・乾隆間(一七三六―九五)重刊本／同右

「遇友」(汲本第二二出)「鬧鶉」(第四出)「生子」(第一九出)「接子」(第二四出)

○『綴白裘』／清・錢德蒼編 清・乾隆三九年(一七七四)宝仁堂原刊、乾隆四二年(一七七七)鴻文堂重刊本／

同右

「鬧鶉」(汲本第四出)「養子」(第一九出)「送子」(第二四出)「回獵」(第三二出)「麻地」(第三三出)「相会」

(第三二出)

汲本第三二出第一曲は「卜算子」盼望旌旗、毎日耳聞消息、聞得孩兒回至。」であるが、『玄雪譜』はこの曲及び次曲までの白も汲本と一致する。それ以降は異同も多いが、『綴白裘』よりは汲本に近い。『綴白裘』でのこの曲を、汲本と同じ文字は○、汲本の文字が欠けていれれば×で示す(以下同様)と、「引」○○○○、○○裏○○○○、××××××。」となる。『醉怡情』の例は後で挙げるが、『醉怡情』も『綴白裘』より汲本に近い。

汲本にあまり近くはないが、『綴白裘』に近いテキストをここで挙げておく。

○『納書楹曲譜』／清・乾隆五七―五九年(一七九二―九四)刊本／『善本戯曲叢刊』所収本を使用

「養子」(汲本第一九出)「麻地」(第三三出)

汲本第三二出第一曲は「八声甘州」慷慨悶損、怎消遣心上橫愁。兒夫別後、淚泣楚聲無投。傷情最苦人易老、那

更西風吹暮秋。休休、猛然間小鹿兒撞我心頭。」であるが、『綴白裘』・『納書楹曲譜』共に第四句を「杳無一紙書投」

に作り、末句を「綴白裘」が「猛聽得雁声叫過南樓」、『納書楹曲譜』が「聽雁声嘸嘸叫過南樓」に作る。  
 続いて、汲本（の祖本）とはやや異なるテキストに基づいたと思われるものを挙げる。

○『旧編南九宮譜』／明・蔣孝編 明・嘉靖二八年（一五四九）自序刊本／『善本戲曲叢刊』所収本を使用  
 二曲収録

○『増定南九宮曲譜』（『南曲全譜』）／明・沈璟編 明・万曆二七年（一五九九）以前成書、明末刊本／同右

二〇曲収録。『旧編南九宮譜』に対し、汲本第一六出第三曲【攪群羊】（商調過曲別本附入【梧桐挂羊尾】）に代えて同出第四曲【前腔】（附録過曲【攪群羊】）を引用し、その他一八曲を加える

○『南詞新譜』／明・沈自晉編 清・順治四年（一六四七）成書、順治二年（一六五五）刊本／同右

二二曲収録。『増定南九宮曲譜』から商調過曲【前腔換頭】（高陽台）（汲本第二四出）を削り、南呂引子【獅子序】（第二出【絳都春引】）と中呂過曲【紅繡鞋】（汲本に無い）とを加える

○『九宮正始』／清・順治八年（一六五一）鈕少雅自序抄本／同右

五七曲収録（注の中に断片的に引かれるものは含めない）。序によれば、元・天曆間（一三二八―一三〇）の『九宮十三調詞譜』と明初の『楽府群珠』に基づき、『漢武帝及唐玄宗之曲譜』である『骷髏格』も用いたという

○『新定十二律京腔譜』／清・康熙二三年（一六八四）序刊本／同右

一六曲収録

○『九宮大成譜』／清・乾隆一一年（一七四六）序刊本／同右

四四曲収録

○『新編劉知遠還鄉白兔記』（成化本と略す）／明・成化間（一四六五～八七）刊本／『統修四庫全書』所収本を使用<sup>(5)</sup>

全体を短く編集したもの。成化本に無いのは、汲本第三出「報社」第八出「遊春」第九出「保讓」第二一出「岳贅」第二三出「求乳」第二五出「寇反」第二六出「討賊」第二七出「凱回」及び第二九出「受封」前半等

○『寒山曲譜』不分卷／清・張彝宣編 清抄本／同右

二二曲収録

○『寒山堂新定九宮十三撰南曲譜』五卷／清・張彝宣編 清・順治一八年（一六六一）以降成書、清抄本／同右  
八曲収録。うち一曲は末尾の一部分しか残っていない

○『南詞定律』／清・康熙五九年（一七二〇）序、香芸閣刊本／同右

四三曲収録

○『欽定曲譜』／康熙五四年（一七一五）成書、清刊本／『康熙曲譜』（岳麓書社排印 二〇〇〇年）を使用

一八曲収録。南曲部分は『増定南九宮曲譜』から商調過曲【高陽台】・【前腔換頭】（汲本第二四出）を削る

以下に汲本第一六出第三曲を挙げて比較すると（今回は異同が多いため、○や×を使わない）、『九宮正始』は汲本と句数・句順が異なり、『旧編南九宮譜』は汲本に無い句が加わる等、各々異なっていることが分かる。

汲本

【攪群羊】嫂嫂話難聽、激得我心兒悶。一馬一鞍、再嫁傍人論。夫去投軍、誰敢為媒証。那有休書、誰敢來詢問。你如何交奴交奴再嫁人。







に「(合)」が付くだけである。

この例では先程と違い、「南詞新譜」が汲本とほぼ一致する。「南詞新譜」や「九宮正始」は、汲本と大きく異なる曲を載せることもあるが、汲本とほぼ一致する曲も同じくらい載せている。

また、この例でもそうだが、「九宮大成譜」は汲本からあまり大きく離れない。「寒山曲譜」も、この例のように諸本とは異なる字に作る箇所が時折見られるが、かといって汲本からそれほど大きく離れるわけでも無い。なお、「新定十二律京腔譜」は弋陽腔系の京腔の曲譜であり、汲本や他の曲譜は恐らく崑山腔のテキストである。しかし「新定十二律京腔譜」が、汲本のような崑山腔テキストと較べて、際立って異なる歌詞を持つということは無い。

この系統の最後に、王季思主編『全元戯曲』第九卷（人民文学出版社 一九九九年）が「汲本祖本与富春堂本的過渡本」と呼ぶ戯曲選本を挙げる。

○『風月錦囊』／明・嘉靖三二年（一五五三）重刊本／孫崇濤・黃仕忠『風月錦囊箋校』<sup>(6)</sup>を使用

【滿庭芳】詞（汲本第一出）「智遠逢友」（第二出）「夫妻遊賞」（第八出）【一封書】「三娘送水飯」「夫妻相別」  
 「小姐綉樓賞翫」（最後の【月兒高】は第一七出第四曲【月雲高】に近い）「三娘挨磨」（第一九出）「慶賞元宵」  
 「三娘汲水 咬齧遇母」「打破磨房 夫妻叙」□

汲本と重複する曲が少ない。更に、「夫妻遊賞」中の四曲は、全て富春堂本（富本と略す）第一〇折にも見え、曲文も富本に近い。しかし全体の内容等を見渡せば、どちらかと言えばまだ汲本に近い印象を受けるため、ひとまず汲本系統としておく。汲本第一出【滿庭芳】詞前関は以下の通りだが、『風月錦囊』は汲本と多少異なる。

汲本

【満庭芳】五代残唐、漢劉知遠、生時紫霧紅光。李家莊上、招贅做東牀。二舅不容完聚、生巧計、拆散鴛行。三娘受苦、産下咬臍郎。

風月錦囊

【○○○】○○○○、○○○○、○○○○潜○。○○○○、○○○○。一○○○○○、心○○○、○○○焉。○○○○、磨房下生○○○。

ここまでをまとめると、汲本系統は『吳歎萃雅』や『酔怡情』など汲本に近いグループと、成化本や『九宮正始』など汲本からやや遠いグループとに大まかに分けられる。前者のグループのテキストは、汲本に非常に近いか或いは汲本に基づいている。後者のグループは汲本に対しても、また、各テキスト同士の間でも異同が多いが、時に一致することもある。各々が一つのテキストとして独立しながら、互いに少しずつ重なり合っている。

## 富春堂本系統

富本は汲本と異なり、子・咬臍郎と母・李三娘とが井戸端で出会う場面で白兔を登場させない。しかし、汲本と同じく白兔を登場させる富本系テキスト（戯曲選本）がある。とりあえず『歌林拾翠』をこの「白兔のいる富本」の代表とし、『歌林拾翠』グループというものを考える。以下、そのグループのテキストを挙げる。

○『摘錦奇音』／明・万曆三十九年（一六一一）刊本／『善本戯曲叢刊』所収本を使用

「三娘汲水遇子」（後述）「咬臍見父訴情」（富本第三七折。最後の三曲は富本に無いが、『歌林拾翠』「回猶見父」終わり三曲と共通）

○「八能奏錦」／明・黄文華編 明・万曆間（一五七三—一六一九）刊本（刊記には「万曆新歳」とある）／同右  
 「承佑遊山打獵」（富本第三四折。五曲中二曲は富本に無い。後述）

○「徽池雅調」／明末刊本／同右

「汲水遇兔」（朝元歌）一曲のみ。後出。「小將軍打獵遇母」（後述）「夫妻磨房重会」（後述）

○「時調青崑」／清初刊本／同右

「三娘汲水」（駐馬聽）一曲のみ。後出。「磨房重会」（後述）

○「歌林拾翠」／清初刊本／同右

「智遠沽酒」（富本第二折）「画堂掃地」（第八折）「夫妻話別」（第一七折）「咬臍出獵」（第三四折）「三娘汲水」（後述）

（後述）「義井伝書」（第三五・三六折）「回獵見父」（第三七折）「磨房相会」（後述）

咬臍郎が、水を汲む李三娘と出会う富本第三五折と、『歌林拾翠』「三娘汲水」・「義井伝書」・「徽池雅調」・「小將軍打獵遇母」・「摘錦奇音」・「三娘汲水遇子」の該当部分とを対照してみる。同じ曲が無い場合は×で示す。但し、富本の「胡搗練」と「不是路」の間の六曲及び詞一首は、どの曲選にも無いため挙げていない。

富本 歌林拾翠 徽池雅調 摘錦奇音 その他のテキスト

【胡搗練】 【胡搗練】 × × × ×

× × × × × 【普天楽】 ×

× × × × × 【并州歌】 汲本第三二出【八声甘州】・徽池雅調「汲水遇兔」【朝元歌】

× × × × × 【駐雲飛】 【駐雲飛】 × 【時調青崑】「三娘汲水」【駐馬聽】

『白兔記』のテキスト

×	【出隊子】	【出隊子】	【引】	×
【不是路】	【不是路】	【賺】	【不是路】	×
【風入松】	【風入松】	【風入松】	×	×
右の続き	【前腔】	右の続き	×	×
右の続き	【前腔】	右の続き	×	×
右の続き	【前腔】	右の続き	×	×
×	×	×	【風入松】	【風月錦囊】「三娘汲水咬臍遇母」【風入松】小將軍」
×	【前腔】	×	【前腔】	【大明天下春】（後出）「三娘寄書」【前腔】聴伊説罷」
×	×	×	【前腔】	【風月錦囊】「三娘汲水咬臍遇母」【風入松】小官人」
×	×	×	【小桃紅】	×
×	×	×	【前腔】	×
【香羅帶】	【香羅帶】	【香羅帶】	×	×
【前腔】	【前腔】	【前腔】	×	×
右の続き	【前腔】	【前腔】	×	×
【尾声】	【尾声】	【尾声】	×	×

「歌林拾翠」と「徽池雅調」は基本的に、白兔を歌う曲（出隊子）を富本に挿入しただけだが、「摘錦奇音」は先程姑く汲本系統としておいた「風月錦囊」の曲を用いる点が特徴的で、富本とは大きく異なる。

夫・劉知遠と妻・李三娘とが碾き白小屋で出会う場面では、「歌林拾翠」「磨房相会」や「徹池雅調」「夫妻磨房重会」、「時調青崑」「磨房重会」は富本の曲を全く使わず、「風月錦囊」の曲を多く用いる。以下に対照表を示す。

歌林拾翠 徹池雅調 時調青崑 風月錦囊

【淘金令】	【淘金令】	【淘金令】	×
【宜春令】	【宜春令】	【宜春令】	×
【江頭金桂】	【江頭金桂】	【江頭金桂】	【淘金令】
【桂枝香】	【桂枝香】	×	×
【皂羅袍】	【皂羅袍】	×	【皂羅袍】
【前腔】	右の続き	×	右の続き
【前腔】	右の続き	×	右の続き
【前腔】	右の続き	×	右の続き
【前腔】	右の続き	×	右の続き

結局「時調青崑」は富本・汲本に無い曲ばかり収めるが、「歌林拾翠」グループには入る。「八能奏錦」は、「歌林拾翠」とそれほど似ているわけでもないが、富本に無い第一曲が、「歌林拾翠」「咬齋出獵」【引】と共通するため、ひとまずこのグループに入れておく。ちなみにこの曲は、汲本第二九出の咬齋郎の下場詩とも共通する。

次に、白兔も登場せず、比較的富本に近いグループのテキストを挙げる。

○『玉谷新篋』／明・万曆三八年（一六一〇）刊本／『善本戯曲叢刊』所収本を使用

「智遠夫妻賞花」(富本第一〇折。後述)

○「詞林一枝」/明・黃文華編 明・万曆間(一五七三—一六一九)刊本(刊記には「万曆新歲」とある)/同右

「劉智遠夫婦觀花」(富本第一〇折。後述)

○「樂府紅珊」/明・万曆三〇年(一六〇二)原刊、清・嘉慶五年(一八〇〇)重刊本/同右

「李三娘磨房生子」(富本第二七折)

○「群音類選」/明・万曆間(一五七三—一六一九)刊本/同右

「磨房生子」(富本第二七折)「子母相逢」(第三五折)「磨房相會」(第三八折)

○「樂府歌舞台」/清・順治間(一六四四—一六六一)刊本/同右

「三娘奪棍」(富本第一四折)。「掃堂」「出獵」「汲水」「伝書」「回獵」は目録のみ残っている

○「樂府万象新」/明刊本/「海外孤本晚明戲劇選集三種」(上海古籍出版社影印一九九三年)所収本を使用

「智遠画堂掃地」(富本第八折)「智遠夫妻玩賞」(後述)「三娘磨房生子」(第二七折)「夫妻磨房重會」(第三八折)

○「大明天下春」/明刊本/同右

「智遠掃地」(富本第八折)「花園遊玩」(第一〇折)「三娘寄書」(第三五折)「磨房重逢」(第三八折)

これらの中でも「群音類選」は、白も含めて富本との間に殆ど文字の異同が無い。次いで「樂府紅珊」が富本に近い。「樂府歌舞台」は富本と文字の異同は多いが、使われている曲は全て富本に見える。

『風月錦囊』のところでも述べたが、富本第一〇折と汲本第八出は、新婚の劉智遠と李三娘が春の日を楽しむ場

面ではほぼ同じ曲を用いる。この汲本・富本共通の曲は汲本系統の曲選・曲譜でもよく引かれる。その後、李三娘の両親が危篤だとの知らせが入る場面では、富本・汲本は共通の曲を持たない。『詞林一枝』はまず汲本との共通曲四曲を含む、富本の六曲を用いる。その後、富本に無い、危篤ではなく死を知らせる三曲が続く。

『玉谷新簧』は収録する四曲中、第一曲は汲本にのみ見える曲で、第二・三曲は富本・汲本共通の曲である。第四曲は富本・汲本に無いが、『大明天下春』『花園遊玩』『終滾』と相似る。危篤や死の知らせは無い。ところで、兪為民「南戯『白兔記』的版本及其流変」(『文献』一九八七年第一期)他によれば、富本は明・郝彪佳「遠山堂曲品」にその名が見える『咬臍記』であるという。『玉谷新簧』は、版心に『咬臍記』(即ち富本)と記し、中心となる第二・三曲の文字が汲本よりも富本に近いことから、一応富本系統に分類しておく。

『大明天下春』『花園遊玩』の二曲(詞一首を含む)は、危篤に関する歌を含む末尾三曲しか富本と重ならず、富本・汲本共通の曲は一部の語句しか使われない。ところで、『樂府万象新』『智遠夫妻玩賞』は目録しか残っていないが、目録は第一曲の曲牌と冒頭七字も載せており、それが『大明天下春』『花園遊玩』第一曲と一致する。

なお、『海外孤本晚明戲劇選集三種』所収の明・黃文華編『万曆二十七年(一五九九)序刊『樂府玉樹英』の「李三娘義井伝書」「劉知遠夫妻相会」は目録しか残っておらず、「義井伝書」という言葉から富本系統としか言えない。更に、葉開沅「『白兔記』的版本問題(一) 富本系統」(『蘭州大学学报 社会科学版』一九八三年第一期)は「纏頭百練二集」(『掃地会妻』)や「崑弋雅調」(『遊山打獵』『義井伝書』)という明末清初の曲選を挙げるが未見であり、「掃地会妻」や「義井伝書」という題目から、これらもまた富本系統であるとしか言えない。

最後に一つ断っておくと、「富春堂本系統」では、各戯曲選本が富本に基づいて編集されたような言葉遣いをした

が、あくまで整理・説明の都合上であつて、ここに挙げた全ての曲選が富本に基づいたと決め付けるわけではない。多くの曲選や富本自体の刊行年が曖昧なため、富本と各戯曲選本の成立の先後が分からない。そのため、戯曲選本に基づいて富春堂本が編集された可能性も残されているからである。

## 注

- (1) 曲選・曲譜の『白兔記』収録状況については、富永鉄平氏による調査結果（未公刊）を主に参照した。
- (2) 『六十種曲』（中華書局排印 一九五八年）所収本を用いる。
- (3) 『古本戯曲叢刊初集』（商務印書館影印 一九五四年）所収本を用いる。
- (4) 底本では判読出来ず、清・乾隆四六年（一七八二）集古堂刊本（『統修四庫全書』所収）に拠り「南」とした。
- (5) 但し本文の引用に際して、加藤聰ほか「成化本『白兔記』訳注稿（一）（二）（三）」『中国研究集刊』第三三、三三五、三七号 二〇〇三―〇五年）に含まれる分については、この訳注で示された校訂後の本文を用いる。
- (6) 中華書局排印 二〇〇〇年。本文を引用する際には、この書で示された校訂後の本文を用いる。

（大学院後期課程学生）



## SUMMARY

The Different Editions of *Baituji*

Satoshi NISHIO

*Baituji* has many editions written and printed in the Ming-Qing period. This paper classifies these editions into four groups according to how similar they are to the Jiguge edition and the Fuchuntang edition. The four groups are as follows:

## 1A. very similar to the Jiguge edition

*Wuyucuiya, Shanshanji, Cilinyixiang, Nanyinsanlai, Yuefueyunbian, Nanbeiciguangyunxuan, Xuanxuepu, Zuiyiqing, Zhuibaiqiu*

## 1B. a little similar to the Jiguge edition

*Jiubiannanjiugongpu, Zengdingnanjiugongqupu, Nancixinpu, Jiugongzhengshi, Xindingshierlüjingqiangpu, Nashuyingqupu, Jiugongdachengpu, Chenghua edition, Hanshanqupu, Hanshantangxindingjiugongshisanshenanqupu, Nancidingli, Qindingqupu, Fengyuejinnang*

## 2A. very similar to the Fuchuntang edition

*Yuguxinhuang, Cilinyizhi, Yuefuhongshan, Qunyinleixuan, Yuefugewutai, Yuefuwanxiangxin, Damingtianxiachun*

## 2B. a little similar to the Fuchuntang edition

*Zhaijinqiyin, Banengzoujin, Huichiyadiao, Shidiaoqingkun, Gelinshicui*

キーワード：白兔記，汲古閣本，富春堂本，戲曲選本，曲譜